



あとがき

教師になったばかりのころは、「児童生徒理解」という言葉を何の抵抗もなく使っていました。しかし、さまざまな子どもたちとの日々のかかわりの経験を通して、目の前の子どもを理解するということは、子どもの前にいる自分をも含めた場の問題として理解していくことなのだと思うようになりました。つまり、「児童生徒理解」のためには、まずは理解しようとする主体である教師自身の自分への気づきが必要だということです。

「関係性」という言葉に出会ったのもそのころです。子どもたちとかかわる過程で、こちらから一方的に「児童生徒理解」ができるわけではなく、両者の関係性の中で理解が深まるのではないかと考えるようになりました。そして、「関係性」という視点から、子どもとかかわりに生かすことのできるものはないかと探しているときに出会ったのが、交流分析の理論と技法でした。

それから20年経ちました。その間、さまざまな人との日々のかかわりの中で交流分析を学び、授業やロングホームルーム、そしてカウンセリング場面などで活用してきました。自分なりに試行錯誤を繰り返しながら、どうしたら学校現場で使えるものになるかという点を中心に取り組んできたつもりです。本書を手にとってくださいました方にとって、この本でお伝えしたことが少しでもお役に立てたらとてもうれしく思います。

この本が出来上がるまでにはさまざまな方のお力をいただきました。

まず、原稿が遅れがちな私に対して、最後まで励ましと的確な助言を与えていただいた、ほんの森出版の小林敏史さんがいなければ、本書は日の目を見ることができませんでした（本書は『月刊学校教育相談』2005年4月号～2006年3月号で連載した、「学校で使えるやさしい交流分析」をベースに加筆・修正したものです）。深く、深く感謝しています。

さらに、私にとって学校教育相談の実践家モデルとしてご指導・ご助言いただいた大野精一先生、心理臨床家モデルとしてご指導いただいた藪添隆一先生、そして北は北海道から南は福岡、高知まで全国の研究仲間の支えに大きな力をいただきました。

最後に、何よりも、妻と息子には日々の支えとなる力をもらってきました。また、私事ながら、一昨年亡くなった父に報告できるものができたと思います。

本当にありがとうございました。

2010年2月

今西 一仁